

その作品群は無事ですが…2

-The old masters are not lost, but... 2-

3 ジョコンダの暗号

うちに絵を見に来ませんか、と沢田綱吉が言った。

一週間ほど雨と曇天が続いた後の、よく晴れた日の午後のことだった。

雲雀は草壁が作成した分厚い報告書を読むのに飽きていたところだったので、まあ行かなくともないと、放課後ふらりと群れの駆除を済ませたその足で窓から沢田家に上がり込んだ。

「……」

ベッドの上には猫が描かれたカードが落とされたかのように置いてあり、そこには『絵はいただいた』と書かれていた。最後の真つ赤なハートマークが凶悪だ。

「すいません、すまません、すみませえんんんっ！」

土下座の姿勢を瞬時にとる沢田を無視してカードに手を伸ばす。どんな光に反射したのか、一部分がきらりと光ったように見えた。

「ほんとに何て言ったらいいのかわ…」

と、平身低頭の沢田の頭上に乗るようになって今度は向こうが透けた立体映像ホログラムの赤ん坊がバレーリーナさながらの格好で乗りカードの記載と同じことを告げる。

——よう、ダメツナ。新事実の発見だ、暫く絵を預かることにする。

「……」なにこの余興。

「今朝までちゃんどあつたし、リボーンにも言つてあつたんですけど」

雲雀は座り直し、手にしたカードの面の角度を変える。

——よう、ダメツナ。新事実の発見だ、暫く絵を預かることにする。

今度は机の上だ、他に細工がないらしく翳して見ても文言は変わらなかつた。

「？」

沢田は不思議そうに雲雀の手元を見、そうしてふつりと消える立体映像になんだこれ？と呟く。

「包みは残つてるんだ」

「そこがまた凶悪ですよね…」

雲雀の言葉にどんよりと返し、悄気たままにがさごそと古い新聞をかき集める。よほどシヨックだったのか、ふと手を止めたかと思うと外国のタブロイド紙らしい包みを眺め、大きな溜息まで吐く。

「……」

あーあ、とぼつりと漏らす。視線に気付くと「無駄足になっちゃって、ほんとすみません」とまた詫びた。

「とりあえずお茶用意してきますから…」

それには及ばない。携帯電話が着信を伝えるべく校歌をのびやかに斉唱している。副委員長からだった、どこかで乱闘でも起こったのだろう、沢田はごゆっくりとぼそぼそと口にし、ベッドの上に畳んだ包みを置いて出て行った。鞆が肩から降りてないうちに気付いていないようだ。雲雀は耳にしながらその後ろ姿を見送る。しよぼくれた小さな肩に何とも言えないような気分になる、軽い苛立ちと胸に重しでも落ちていくような何かだ、雲雀に見せられないことに落胆しているのか、それとも預かっている物を赤ん坊に勝手に持ち出されたからここまでべしやんこになっているのか。

「…連絡が来た」

手にした携帯電話が数回震えて沈黙した、滅多にしないメールが届いたらしい。

沢田は振り向くと首を傾げる。

「消えたって」

メール画面を開けば転送された軽薄なイタリア男が謝っているらしい図で、笑っているようにしか見えない表情など携帯電話自体を壊したくなる。

「え？」

「あの子供だよ」

きよとんとさせてから思い出したらしく、ほんとですか、と顔つきを変える。

「傷は大丈夫なんですか？ 話は？ いったいどうしてあんなことに…。巻き込まれたんでしょうか？ 親に連絡がついたとか、…消えた？」

雲雀は削除を済ませると腕を組む、沢田は正しく言葉を受け取っている。証拠に、矢継ぎ早に出していた問いを引っ込めて考えるように黙り込んだ。

「入院はしていたけど治療は終わっている」

「…骸が？」病院から？

「分からない」

雲雀たちの読んだとおりに子供に両親はいなかった。親戚までは辿れなかったが、住んでいた場所や身を寄せていた教会などは知れた、ディーノはそこに連絡を取ったらしかった。六道骸などという胡散臭い男と同行する以上、普通の平和的とは言い難い何かを背負っているだろうと警察には一切を預けなかった、任せたのは派手な車の方だとディーノは言っていた。

「電話で誰かと連絡を取っていたのは確かみたいだけど」

副委員長が伝えたのはそこまでで、ディーノ本人からは詫びのポーズのアレだけだ、バカにするにも程があるんじゃないのか。役に立たないし、本当にあのひとムカつく。

「……」

沢田はじつと雲雀を見、もう言わなくていいというように首

を横に振った。雲雀は敢えてそれを無視して続ける。

「でも、六道骸だろうね」

相手はなんでだよ、と呟くように言う。くるくる変わる表情も痛いような悲しいようなのばかりになり、六道骸が関わりと俯いてばかりだ。ちっともおもしろくない。

「あいつ、ほんとわっかんねー」

「本当にね」

雲雀は息を吐く。じゃあ、と窓に行こうとすると腕を引つ張られているのに気付いた、掴まれた腕と手を離そうとしない沢田とを交互に見た。彼は自分の袖を掴んでるのを分かっているのか。

「これ…」

と、口にしかけた。ヒバリさんに聞きたいことがあります、といささか強張った声が聞こえる、必死みたいだ。相手の身体全体から伝わるオーラにどうしてか心臓が跳ねそうになり、身構えてしまう。

「あの、修復画家って…」

「……」

開いた窓から風が入る、無言で閉めた。ひよつとしていま沢田を殴ってもいいのではないか。だけど出たのは溜息だった。

「言わなかったっけ？」 腰を下ろす。

「腕の良い職人とか」

そういえばそうだったと思ひ出す。

階下から沢田を呼ぶ声がして、沢田はあたふたと転がるように部屋を出て行く、飲み物と菓子袋を手に戻ってきたときに目を合わせるも心なしかほっとしたように見えた。

「マフィアAとBの兄弟の妹が結婚したのは修復画家だった」
盆にはソーダに手作りのアイスクリーム。アイスには桃やオレンジが乗っている、サンクランボがあつてパイナップルがない。プリンがなかるうが階下では凄まじい熱戦が繰り広げられていそうなメニューだ。匙を手にした、だくことにする。

「生死不明の状態だ、娘は修道院に預けられたらしい」

国境を越えたところに祖父母がいるそうだからもしかしたら引き取っているかも知れない。いずれにしろ、雲雀の知るところではない。けれどもそんなことを沢田だから気にするのだから、遠い国の、いくつかある悲劇の一つでしかないのに。

「いえ、あの、修復画家が失踪したひとつだつてことは話して分かったんです、オレが知らないのはどういうことをするのかつて。えっと、…画家？」

沢田のくせに鋭いことを聞く。修復する専門と描くだけの方とで雲雀は気にせずにしたのだが、副委員長が区別して資料を寄越してきて知ったことだ。修復、習作、偽造、複雑に入り組んでおり、その分野の犯罪の線引きは時代を遡るにつれて曖昧になってくる。

「本職は修復、作品の汚れを取ったり欠損箇所などを補ったり、直す職人だ。絵は描いて飾られたら終わりってわけじゃな

い。せがまれて絵も描いたらしいけど」趣味は映画鑑賞だそうだよ。

「ただの修復家ならこんなに早く素性も掴めなかつただろうが、一点だけ画商が扱ったオリジナルの作品があった、現物も見に行った。雲雀に絵は分らない、だけど狭い額の中の世界には無数の情報が塗りたくられるのだということは知った。

しかも趣味が映画鑑賞であつたばっかりに不幸な目に遭つたとも言える。失踪する直前までその男は映画を観ている。

「並盛にも修復してのがあるって言つてましたけど」

「そう。飾つていけば埃が溜まつたりしていくし、褪色する。保存が悪ければ尚更だ、絵は絵でなくなる」

「どんなものでも直せるんですか？」

雲雀から何を引き出したのか、自分のアイスが溶けるのにも気にせず熱心に聞いてくる。そんなに興味を持ったのなら、図書館やら美術館にでも行けばいいと考えながらもまんざらでもない思いが心に満ちてくるのを感じる。

「保存状態や画材にもよるだろうし、焼かれたりしたら別だろうけど、それなりに再現できるとは聞いている」

「画材ってどんなのが？」

「絵なら描いてあるところどこでもだろ。紙や布、木が殆どだろうけど」

つまりは描かれるものは木が材料になつたものが多いということだ。木との相性で石が絵の具として使われるのも話してい

て納得がいく。なるほど染めるのは草で、描くのは石だ、たまには沢田も役に立つ。

「…？ ヒバリさん？」

「別に」

完食して匙を置く。と、窓ガラスを貫いて背後から殺気に似たものが突き刺さる。

——ごっ！

雲雀が避けたのは殺意、ではなく矢状のものだった、ガラスには貫通の穴とそこから放射状のヒビが伸びている。前を向けば沢田が顔面にその衝撃を受け止めていた、丁度持っていたのが匙だけというのは救いだらう。

「む、お…」

沢田は呻きか言語のようなものを発し、顔にへばりついたそれを剥がそうとしている。まるでパイでも受けたかのような暢気な格好だが、受けたら先端が開いて貼り付くなどよく考えたものだ、と雲雀は見ながら感心していた。

「レ、オ、ン…ん？」

赤ん坊の使う便利なカメレオンはきよろりと目を回すとまたその形状を変える、巻物のように横長の筒状に伸びると口から手紙を吐き出した。

「……」

手紙は二人の間にぽとりと落ち、せいせいしたという顔でカメレオンがのそのそとハンモックへ進むのを沢田は手紙を手